

# 「個別最適な学び」と「協働的な学び」を基盤にした授業づくり

## ～カリキュラム・マネジメントを生かした教科横断的な学習を通して～

金武町沖縄県立嘉芸小学校  
東 盛 麻 里

### 1 はじめに

本校では今年度より、自己実現を目指したキャリア教育の推進を図ることで主体的に学ぶ児童の育成を目指して研究を進めている。その際、カリキュラム・マネジメントを生かした教科横断的な学習を仕組むことで、学びを広げたり深めたりしていきたいと考えている。国語科においても、児童個々が自身の興味・関心のもつ内容について探究活動をし、学びの成果を他教科の学習と関連させることで、さらなる深い学びにつなげていきたい。そこで、児童個々が学びを選択する機会を意図的に設定し、必要に応じて他と学びを共有したり考えを交流したりする機会もつくっていききたいと考え、次に示す学習を展開した。

### 2 単元について

単元名 作品の魅力を朗読で伝えよう

主教材 「川とノリオ」(『ひろがる言葉 小学国語六上』教育出版)

補助教材 『アンネフランク』ポプラ社 『庭のマロニエ』評論社 『アンネの日記』文集文庫  
『杉原千畝と命のビザ』汐文社 『黄色い星』BL出版

### 3 単元の構成

学習前・他教科の学び			
国語科	社会	道徳	総合的な学習の時間
○補助教材を紹介し、教師による読み聞かせをする。 ○特に気に入った作品を選び、各自読み深める。→どこに惹かれたのか(場面、表現、展開…)を明確にする。 ○補助教材以外の戦争関連の本を読み広げる。	○日本国憲法の三原則の一つ「平和主義」について学び憲法9条ができた背景をつかむ。 ○満州事変から第二次世界大戦までの流れをつかみ、日本がたどった戦争への道についてつかむ。	○沖縄戦、特に地域に残る『屋嘉節』に触れ、どのような思いが歌に込められているのか考え、平和の尊さについてつかむ。 ○戦争による社会的不公正さの存在を理解し、その非人間性さを捉える。	○平和学習を通年で行う。社会科との関連で、第二次世界大戦から太平洋戦争までの流れを調べ、これまでの戦争に関する知識をアップグレードする。 ○沖縄戦以外の戦争、被害があることをつかむ。

上記の学びがベースとなり、本単元の学習が展開



次	時	内容…評価	指導上の留意点
一	1	○言語活動のモデル(『一つの花』を朗読)を提示し、【単元のめあて】と【学習のゴール】の確認をする。 ○学習計画を立てる。…学習のゴールに向かってどう学習を展開したらよいか、計画を立てることができる。	ゴールにたどり着くには、どう学習を展開したらよいか、児童が意見を出し合い、決定する(自己決定)。
	2	○ノリオ、川、川っ淵に視点を置き、その様子をまとめる。…人物像や物語の全体像を具体的に想像している。	表にまとめることで見えてくるもの、気付くことを確認する。
	3		
二	4	○心に留まった表現技法とその効果について考える。 …比喩や反復などの表現の工夫やその効果を考えている。	表現技法の有無でどう印象が変わるか考えさせる。

	5	○朗読の工夫について考え、考えを交流する。 …作品を読んで思ったり考えたりしたことを、表現性を高めて伝えようとしている。	自分の考えを確立させてから、交流活動を行う。→〈協働的な学び〉
	6	○工夫して朗読する。 …心惹かれたところを、その理由を明らかにしながら工夫して朗読している。	各自の朗読を、タブレットを使って録音し、互いに聴き合い交流する。→〈個別最適な学び〉から〈協働的な学び〉へ
三	7	○補助教材の中から選んだ一冊について心惹かれたところとその理由をまとめる。 …人物像や物語の全体像を具体的に想像し、音読の工夫に生かそうとしている。	同じ本を選んだ者同士でグループを編成し、学びを深める。 →〈個別最適な学び〉から〈協働的な学び〉へ
	8	○工夫して朗読する。 …すぐれた表現を味わいながら工夫して朗読している。	各自の朗読を、タブレットを使って録音し、互いに聴き合い交流する。→〈個別最適な学び〉から〈協働的な学び〉へ
	9	○学習のまとめをし、ゴールにたどりつけたかどうか、自己評価する。…学びの成果を文章にまとめて他へ発信している。	学習の成果をまとめさせることで、自身の成長に気付かせるようにする。



学習後	
国語	総合的な学習の時間
○さらに、戦争関連の本を読み進める。 ○最も心に残った一冊を選び、読書感想文にまとめる。	○あらゆる視点から第二次世界大戦を見つめ、さらに深めたい学びをテーマにして調べ学習を展開する。 ○調べたことをもとに壁新聞を作成し、より多くの人に向けて学びの成果をアウトプットする。

#### 4 「個別最適な学び」と「協働的な学び」を基盤とした授業づくり

これまで「個に応じた指導」とよく言われてきた。必要に応じて教師が適切に指導・支援するという意味である。それに対し「個別最適な学び」とは、児童が自ら学習を選択・調整し、主体的に学ぶということである。つまり、前者は授業者視点であり後者は学習者視点ということである。それをしっかりと認識した上で、授業構想を練ることが重要だと考える。

児童が自ら学習を選択するということは、教師側はその機会を作るということである。学習のルールを丁寧に敷き、そのルールを辿らせてゴールを目指すのではなく、要所所で児童自ら考え、判断し、学習を選ぶ機会を作っていきたい。まず、第1時では学習計画を児童に立てさせる。【単元のめあて】と【ゴール】を確認した上で、どのような学習を展開したらゴールにたどり着けるのか考えさせる。9時間分の計画を一人で立てるのは6年生とは言え難しい。そこで、他と考えを出し合い、話し合いながら計画を立てる。「協働的な学び」によって、計画が立案される。

第4時で表現の効果について学ぶ際には、個々の思いを大切にしたい。作品中に出てきた表現技法をすべて抑える、というのではなく、自分が心惹かれた場面にある表現技法であったり、表現そのものが気に入った技法であったりを書き出させ、その効果について考えさせる(写真1)。多くの技法を見付け出すことが目的ではなく、児童個々が心惹かれた表現に出会うこと、そしてその効果について自分なりに考えることで、作品に浸らせたいと考える。それが朗読の工夫に繋がると期待する。

さらに、補助教材の中から気に入った一冊を選び、その中でも最も心惹かれた場面、表現、展開などを朗読させる活動を行う。ここでも大事にするのは“個”の思いであり、そこから「個別最適な学び」へと繋げていきたいと考える（写真2）。

児童一人一人が、自分の思いで学びを選択し調整する中で大事にするのが、他との交流、他への発信である。個々の考えがしっかりと形成された上での交流は、必然的により深い学びへと発展する。作品や自分自身としっかりと向き合い対話した結果、得られた思いや考えは他へ発信させたい。そうすることで自他の共通点や相違点に気付き、考えを広げさせたり深めさせたりしたいと考える。つまり「協働的な学び」の展開である。自分が気付かなかったことに気付かされたり、自分の考えをさらに強固たるものになったり。そうした成果が「協働的な学び」から得られると考える（写真3）。ただ、最後はやはり“個”に戻って、学習の成果を実感させたい。そして、次への学びの意欲につなげていきたい。

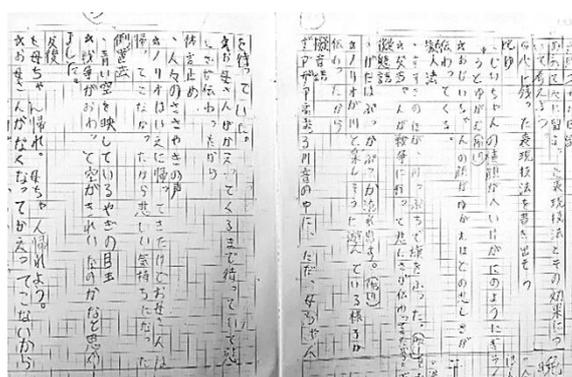


写真1 「心に留まった表現技法とその効果について考える」授業（第4時）。各自の思いを大切にした授業展開を心がけた。

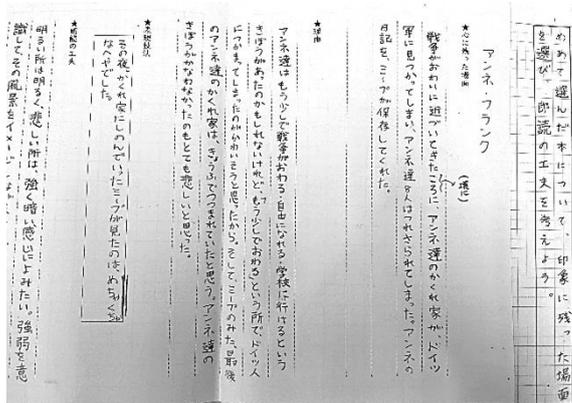


写真2 「自分が選んだ作品について、心惹かれたところとその理由をまとめる」授業（第7時）。教科書教材で同一の学習活動を第5時で経験。その学びを生かして、同じ作品を選んだ者同士でグループを編成し、使われている表現技法とその効果等をまとめ、どう朗読に反映させるか考えた。

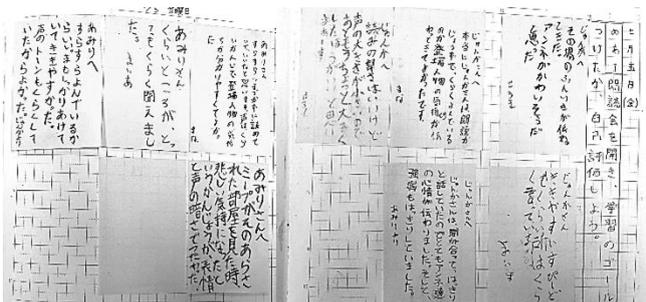


写真3 互いの朗読を聴き合い、その良さを交流（第8時）。「協働的な学び」から学習を深めていった。

## 5 学習の実際（5/9時）

1 本時のねらい	
朗読の工夫について考えを交流し、よりよい朗読について模索する。	評価方法 ノート、観察
2 めあて、まとめ、振り返り	
(まとめ) 考えの交流からもらったアドバイスを生かして、場面の様子や登場人物の心情が伝わる朗読にしていく。	(めあて) 朗読の工夫について考えを交流し、よりよい朗読について探ろう。
← 正対 →	
(振り返り) ・友達から「もっと思いが伝わるように、強弱を付けるといい」と助言してもらった。よりよい朗読を目指して実践したい。 ・友達の工夫から、「自分の朗読にも生かせそう」と気付かされたことがあった。すぐに真似てみたい。	

### 3 本時の展開

[導入]…10分

- 1 前時の学習を振り返る。  
前時の振り返りから、本時のめあてにつなげる。
- 2 本時のめあてを確認する。

【めあて】朗読の工夫について考えを交流し、よりよい朗読について探ろう。

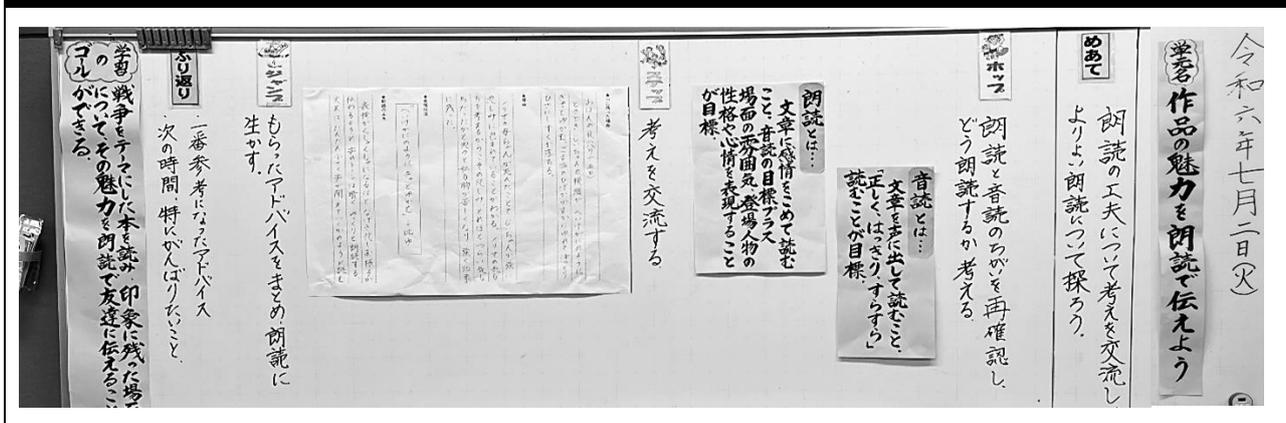
[展開]…30分

- 4 音読と朗読の違いを再確認し、どう朗読するか考えを記入する。
- 5 考えを交流する。  
※支援が必要な児童へ適切に支援する。  
「協働的な学び」によって、学習を深める。
- 6 もらったアドバイスをまとめ、朗読に生かす。  
※交流の成果を記述させ、次時の学習に生かすようにする。  
「協働的な学び」から「個」へ戻り、成果をまとめる。

[終末]…5分

- 7 本時の学習を振り返る。  
※視点は、「一番参考になったアドバイス」「次時、特にがんばりたいこと」
- 8 次時の予告をする。  
※「朗読の練習」を家庭学習として課す。  
授業と家庭学習との連動を図る。

### 4 板書レイアウト等



### 6 学習を振り返って

本教材を用いての授業はこれまで幾度となく実践してきた。ただ、これまでと違ったのは児童の興味・関心がどこに向かうかである。沖縄という地域性から、太平洋戦争については毎年学習を重ねてきている。そこで、沖縄戦に関する図書教材を読み広げさせたこともあった。また、いぬいとみこさんの作品を数冊紹介したことで、作者に注目しその生い立ち、おかれた環境に興味をもち、さらに作品を読み広げていきたい、という年もあった。本教材を通して、原子爆弾による被害を知り、広島や長崎での戦争被害に興味をもつ年もあった。今年は何となく、年度当初から世界情勢に興味を示す児童が多く、太平洋戦争に至るまでの第二次世界大戦の起こりに興味を示す子ども達が多かった。「初めて知った史実」に驚き、もっと学んでみたいという強い思いを感じたからこそ、並行読書材を第二次世界大戦に関連する本を選書し、児童に読み聞かせしたのが本単元のスタートであった。児童の興味・関心を何より大事にして授業構想を練ったことが主体的な学び、そして深い学びへと繋がったと感じている。これは、カリキュラム・マネジメントを生かした教科横断的な学習の成果とも言える。また、個々の思いを大事にしつつも、他者との学びの機会・交流を通して児童一人一人が自分の考えを広げたり深めたりできたことも今回の学習の成果と言えるであろう。

課題として残るのは、ICTをより効果的に活用し、より多くの他者と交流を深める機会をつくることである。誰と交流するのか児童自身に選択させる機会を与えていくことで「個別最適な学び」と「協働的な学び」の効果的な実現につながるものだと考える。

《参考文献》『国語授業の「個別最適な学び」と「協働的な学び」』水戸部修治著/明治図書

『ICT&一人一台端末を活用した言語活動パーフェクトガイド』水戸部修治著/明治図書